

文化庁

43. 11

〈月報〉

昭和43年11月15日 発行

編集発行 文化庁長官官房庶務課
東京都千代田区霞が関3-2-2
電話 代表 (581) 4211
郵便番号 100

〈第3号〉

(題字=今日出海 文化庁長官)

文化勲章

堅山南風氏ら四人に

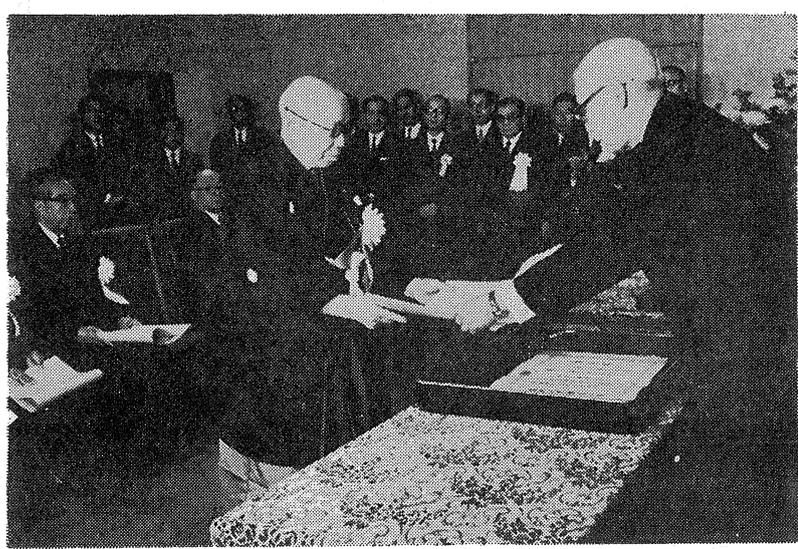
功労者は山田抄太郎氏ら十人

今年度の文化勲章受章者と文化功労者が、十月二十五日の閣議で決定した。

文化勲章は、内科学の黒川利雄、土木工学の鈴木雅次、陶芸の浜田庄司、日本

画の堅山南風の四氏。文化功労者は、日本画の小野竹喬、独語・独文学の相良守

峯、書の鈴木翠軒、数学の園正造、経済学の中山伊知郎、英文学・評論の福原麟太郎、邦楽の山田抄太郎の各氏。



…灘尾文相から顕彰状を受ける功労者…

文化勲章受章者は同時に文化功労者となるが、すでに堅山南風氏はさる三十八年に功労者となっているので、今回の文化功労者は十人である。

ことしの文化勲章授与式は、十一月三日皇居で、また文化功労者の顕彰式は、四日国立教育会館で行なわれた。文化功労者には、終身年金百万円が贈られる。

これで文化勲章受章者は百四十六人(現存六十八人)、文化功労

者は二百八人(現存百八人)となった。文化勲章受章者、文化功労者各氏の業績は、次のとおり。

文化勲章受章者

日本芸術院会員

日本画 堅山熊次(南風)(81)

花鳥、魚類の描写にすぐれた才能をみせ、のち人物画の領域をも開拓し、その連作において朴訥正直な表現のうちに墨色を基調とする円熟した東洋的境地を示して、淡々と自己の作風を深めたが、真摯な作画態度と晩成の風格は、日光東照宮境内本地堂の天井画「鳴竜」においてみごと結実した。その大作は、東洋画独特の技法を今に伝える雄渾、闊達な筆線と彩調とをもち、伝統的な日本画の真価を示している。

文化勲章受章者

財団法人民芸館長

陶芸 浜田象二(庄司)(73)

わが国における民芸品のうちに新しい美を発見し、これを基調として多年にわたって作陶を続け、多くの名品佳作を出した。その作品は、日用雑器のもつ美しさを芸術的に高め、豪快で迫力にみちたものであり、世界各地の国際展でも受章して世界的に評価が高い。

昭和四十三年度

文化財愛護全国研究集会開く

昭和四十三年度文化財愛護全国研究集会が、さる九月二十六日(木)、二十七日(金)の二日間にわたって、滋賀県大津市比叡山延暦寺会館で開催された。(文化庁、滋賀県教育委員会、大津市教育委員会共催)

この研究集会は、昨年度から現地で行



研究集会における今長官の講演

なわれたもので(昨年度は六月に鎌倉市で開催された)、本年度は第二回目にあたる。昨年は、「文化財愛護モデル地区」の関係者を対象として開催したが、本年度は、参加対象を拡大して、「文化財愛護モデル地区」の関係者に加えて、全国の道府県教育委員会文化財関係者および文化財に関心のある

一般関係者の参集をもとめて、文化財愛護の実践活動とその成果を中心とした研究協議を行ない、文化財愛護地域活動の振興に資することを目的として実施された。当日の参加者は、以上の構成により百名に及び、期間中終始熱心な研究が継続された。なお、研究集会の初日に今文化庁長官の別掲のような講演が行なわれた。実施された研究集会の内容で、おもな事項は、次のとおりである。

(一) 事例発表

文化財愛護活動の現状と課題について、左記の五地区(いずれも本年度文化財愛護モデル地区)の代表がそれぞれ各地区の重点施策にもとづき、研究と体験の成果を発表した。

- 福島県郡山市(民俗調査と民俗資料館の設置について)
- 長野県長野市(文化財愛護活動の推進について)
- 兵庫県伊丹市(地域生活と密着した文化財愛護少年団)
- 島根県大田市(文化財愛護少年団の育成について)
- 宮崎県西都市(西都市における文化財愛護活動の現状と課題)

発表後は、参加者との間に活発な質疑応答が行なわれ、参加者全体の文化財愛護活動に対する強い関心がかがわれた。

(二) 研究協議

参加者を四グループに分け、次の三主題を各グループの共通テーマとして二日間にわたり正味四時間を費やして熱心な討議がくりひろげられた。

- 地域における文化財学習活動の計画、方法について
- 愛護グループ(文化財愛護少年団等)の育成について
- 愛護思想普及のための広報活動の展開について

られたが、各グループの研究協議において共通的に取り上げられたおもな今後の課題は、次の諸点であった。

- ① 学習活動について
 - 学校教育、社会教育相互の連絡をいっそう緊密にして、適切な学習計画をたてるべきである。
 - そのためには、学校教育、社会教育における文化財指導者の養成に一段と力を入れる必要がある。
 - 既成の学習活動(青年学級、婦人学級等)に文化財学習をより多く取り入れるとともに、視聴覚教材等の活用を積極的に行なうべきである。
- ② 愛護グループについて
 - 地域住民のあらゆるつどいの場に文化財を取り上げ、住民の関心を高め、これを基礎に組織づくりをはかるべきである。
 - 地域全般に愛護精神の高揚をはかるためには、既成の組織(こども会、婦人会、老人クラブ等)を活用し、各種団体活動に文化財を取り入れてゆくと努力が必要である。
- ③ 広報活動について
 - マスコミの利用については、あらゆる機会をとらえ、文化財のPRをさかんにすべきである。
 - 有線放送、県、市町村刊行の広報紙の利用、視聴覚教材の活用等にいっそう工夫が必要である。

文化財を保護しようとする努力と同じように、時代の要請で文化財を破壊しようとするような動きが強く出てきているのが今日の世相である。つまり、これら二つの相反する力をどのように均衡させるかが、いま重要な問題なのであって、他のために一つを捨てることはできないものと思う。

ことしは明治百年にあたるが、百年もたてば人の考えは変わる。明治の初めは城は封建時代の遺物で無用の長物だということ、火薬が何かで爆破したりなどしてほとんど全部こわしてしまった。百年後の現在は、熱海城に象徴されるように、本来の城とは全く無関係の施設を無関係の場所にやたらと建てている。先人がつくったものをむぞうさにこわしてしまっただけで、むやみと鉄筋コンクリートの城をつくるのもおかしなことだ。

人間は個人個人の自律性、自分の判断の上に立ってものごとを処理しなければならない。その点、日本人はその時その時で考えが変わりやすく、あとで考えてみると非常に大きな矛盾を侵すことが多い。大いに反省しなければならない。

世界の中では日本は小さな島国であるが、島国根性にもおもしろい面がある。有吉佐和子氏の「海蔵」という小説は、東京湾の南のほうにある御蔵島を舞台にした小説であるが、そこに、がんこで意地の悪いばあさんが住んでいる。東京に

働きに出たいとか、勉強に出たいとかいう女性や青年もいる。島の中では、かれらは隣近所みな仲が悪い。これは日本という島全体の縮図のようにも思われ、非常におもしろい小説である。

島国にいと、「隣は何をする人ぞ」で隣のことがばかりが気になる。小はアパートやマンションの奥さんどうしのけんかから、大は奈良時代に隣の中国大陸にどうい文化があるだろうかとのぞいてみたくなる気持ち。こういう好奇心は決して悪いものではない。好奇心には知的好奇心や学問的好奇心もある。好奇心のないところに文化は育たない。

地方文化の振興は 郷土に誇りをもつこと

文化財というものはだいたいがどろくさいものである。しかし、発掘品と伝世品とは値段が非常にちがう。伝世品というものは、たとえば茶人が毎日使い、洗い、みがき、大事にしてきたようなものである。それが息子や弟子に大事にされるながら次々と伝えられてきたから値段も高いのである。われわれ日本人には、そういうものを大事にしていこうという一つの文化的な感覚が血の中に流れている。日本には、博物館にかぎらず、東洋美術のすばらしいものがたくさんある。神戸の白鶴美術館の中国の銅器は、世界で

も最もすぐれたものであろう。中国へ行って北京の故宮博物館や南京の博物館を見たが、目ぼしいものはそう多くはない。台北の故宮博物館には金目のものはたくさんあるが、それほどすぐれたものとは思わない。朝鮮でもそうだ。すぐれたものは日本のほうがたくさんある。

日本の建物は、紙と薪でできているようなものでありながら、非常によく残っている。それも日本が平和だったからではなく、戦争また戦争をくりぬけて、しかもこのようによく残ってきた。これは、日本人がそういうものを大事にする気持ちをもってきているからである。封建時

今長官講演要旨

代はどうのこうのというが、封建時代の中で、われわれの文化はどれほど守られ、進められ、高められてきたかを考える必要がある。

明治百年でいちばん大きな功績は、教育である。しかし、この教育も明治になってから急に進んだのではない。日本人は、あらゆる時代を通じて積極的な学問的精神をもっていった。たとえば、慶長年間に日本にキリスト教を布教したフランシスコ・ザビエルは、日本人の頭のよさを発見して非常に驚いている。日本人は、そういう素質を代々受け継いできたのだ。

芸術や文化というものは、天才の突如たるインスピレーションなどでできるものではない。長い間のいろいろな経験と訓練をへて、しだいにその人の才能が開発され、自分のクリエイション(創造)が出てくるものである。

日本人は、まねばかりしているというが、とんでもない。いったい、世界のどの国にクリエイションだけの国があるか。日本は島国だから、外国の文化を輸入するのは当然である。西洋の場合は、フランスとドイツ、イギリスとヨーロッパ大陸というように、距離が非常に接近しているから、外国の文化の輸入、模倣、そして、消化、吸収という経過があまり目だたないが、日本の場合、外国と距離が離れているから、どの国から、いつ、どの港に、何がはいつてきたかということが歴史的に見えやすいというだけである。

模倣のないところにクリエイションはない。これは、どこの世界でも同じで、模倣性の強い国民ほど文化も高く、活力のある国民である。

聖徳太子は、進んで隣国の文化を吸収した。その積極的な気持ちの点で、聖徳太子はまさに日本文化の父である。

文化財を大事にするということは、社会道徳などちがって、自分からそれが好きになるということが大事である。文化財だから大事にせよというのでは不十分で、それを大事にせずにはいられない

という気持ちから、どうしても残さねばならぬという愛情が起こって、はじめて文化財は守られるものである。

学者は、文化財を守ることを錦の御旗にしきのみはたと考える。同じ日本人でも、道路や鉄道を敷かなければならない人は、日本の近代化を進めるといふ錦の御旗を持って、両者はどうしてもぶつかりあうし、これからもこの衝突はさけられないであろう。しかし、これはその価値や状況を判断して、ケース・バイ・ケースで処理して行かなければならない。文化財保護には一つの原則はない。両方がとことんまで話し合い、考え、また、反省もしな

がら、一つ一つを解決していかなければならない。

文化財は大事にするが、景色は大事にしないというのでも困る。観光地の広告のまずさには、まずそこに住んでいる人が反対してほしい。このような、国民にとって好ましくないものを取除いていく声が大きくなれば、文化財保護の一つの大きな原動力となる。

文化財を守っていいこうという気持ちやふんい気をその土地土地に植えつけていくことは、文化財そのものを守っていくことと同じように大事なことである。文化とは、おどりや歌がうまくなるこ

とではない。文化とは、心にゆとりをもつこと、心に潤いをもつことである。それは、自分たちの郷土に誇りをもつことであり、自分たちの郷土の特色を育てていくことである。誇りのないところに文化は育たない。

聖徳太子の積極的な文化の吸収と、そのそしゃくという奈良時代の心のゆとりを、われわれはもう一度回復しなければならぬ。

人間の魅力と同じように、国にも魅力がなければならぬ。南方などへ行っても日本人はあまり好まれていないが、これは日本人が文化に欠けるところがある

からである。われわれは、文化の能力を先祖から受けついでいながら、文化的な魅力に欠けるということは反省しなければならぬ。

日本人が広く日本に誇りを持ち外国の人から愛されるようになる事が日本の文化にとっていちばん大事なことである。

文化庁の第一の仕事は、地方文化の振興である。地方の人は、自分の住んでいるところをどれだけ愛し、どれだけ誇りに思っているか。

地方文化の振興とは、郷土に誇りをもつことから始まる。みなさんも、郷土の文化の振興に一役を買っていただきたい。